

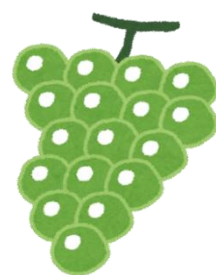
町小だより

令和7年
9月25日
No. 700
御免町小学校

シャインマスカットを味わいながら

校長 土田 利康

実りの秋を迎えました。私が住む聖籠町では、6月と9月になると、県道や町道に車があふれる現象が起きます。果物狩りです。6月はサクランボ、9月はブドウやナシです。ブドウはシャインマスカットという品種が人気となっています。シャインマスカットは、粒が大きくて甘く、種が無く、皮ごと食べられるという特徴が人気の理由です。見た目も鮮やかな黄緑色で美しく、宝石のようだとたとえる人もいます。最近ではスーパーやデパートでもよく見掛けるようになり、贈り物としても喜ばれています。



しかし、私が子どもの頃には、シャインマスカットはありませんでした。いつ頃誕生したのか調べてみると、2006年に品種登録され、誕生までに33年もの長い年月が掛かっていると分かりました。開発を始めたのは1973年。研究者や農家の人たちは、「もっと甘くて食べやすく、おいしいブドウを日本で作りたい」と考えましたが、新しいブドウを作るのは簡単なことではありません。いろいろな品種を掛け合わせて育ててみてもうまいかず、甘くなっても種が残ったり、種が無くなっても皮が固くて食べづらかったり、香りがよくても見た目がよくなかったりと思うようにはいきませんでした。また、ヨーロッパ由来の品種は、雨の多い地域では実が割れたり病気になったりしやすく、日本の気候には適していませんでした。一つの品種を育てるのにも何年も掛かるので、掛け合わせて結果が出るまでにはより多くの時間を要します。何度も失敗を繰り返し、そのたびにやり直すという気の遠くなるような作業が続きました。それでも研究者たちは、「どうすればもっと良くなるだろう?」と根気強く考え、育て方を工夫し、気候や土の要件も見直しながら少しずつ改良を続けていきました。そして33年後、ようやく、すべての条件を満たすブドウが誕生しました。これが、今私たちが食べているシャインマスカットなのです。

どの業界でも、成功の裏には、数え切れない程の失敗があります。そして、その数を上回る挑戦があります。目の前にある電化製品や文房具にも、様々な努力や工夫が詰まっているはずなのです。NHKの番組でも時々取り上げられていますが、子どもたちにはICT等を活用して、その努力や工夫などを知り、自身の挑戦に生かしてほしいと思います。

「最近の若者は我慢や根性が足りない」などと耳にすることがありますが、果たしてそうなのでしょうか。離職や転職は今に始まったことではありませんし、大学を卒業して間もない若者の様子を見ても、立派な立ち居振る舞いをしている人が多いと感じています。様々な問題を「時代の流れ」と安易に片付けず、私たち大人は夢をもつすばらしさやそれに向かって努力する大切さなどを、地道に子どもの心に響くように伝えていくことが大切だと思います。

「努力の結晶」であるシャインマスカットを味わいながら、関わった人々の思いを感じたいと思います。